

松尾芭蕉とにかほ市

■象潟全国俳句大会開催

8月5日、第39回奥の細道象潟全国俳句大会が開催されました。全国の俳句愛好者から400句を超える俳句がよせられ、また、県内の小中学生からもたくさん投げられるなど、多くの人が俳句に触れる良い機会となっています。

今回のコラムでは芭蕉とにかほ市、特に象潟との関係を「おくのほそ道（以下、奥の細道）」から掘り下げてみたいと思います。多少の思い込みや思い違いもあるかもしれませんが、そこは大目に見ていただければと思います。

■奥の細道の目的

松尾芭蕉が著した紀行文「奥の細道」は元禄文化を代表する名著です。400字詰め原稿で30枚程度のその作品は、いまなお多くの人々に愛される俳諧紀行文の最高傑作とされ、海外でも高く評価されています。

「奥の細道」は、江戸の深川から岐阜県の大垣まで歌枕の地を訪ねる旅でした。この旅の最大の目的地は二つと言われています。一つは「松島」、もう一つは「象潟」です。このことは日光のくぐりの中で（同行した曾良が）このたび松しま・象潟の眺め共にせん事を悦び」と書いており、象潟の景色と松島の景色を見比べたくて旅に出たことが作品の中でしっかりと述べられています。もっとも芭蕉は旅の目的には4つがあるとして、その4つを奥の細道への旅の二年前に書いた「笈の小文（おいのこぶみ）」

の中で次のように記しています。

- ・ 神の作り出した美しい景色をみる
- ・ 一切の執着を捨てた仏道修行者の旧跡を訪ねる

・ 歌枕を訪ねて古人の感動を追体験する
・ 片田舎で俳諧に志のある人に出会う
象潟のくぐりはなかなかの長文で、しかも本人の二句を含めた五句の俳句をのせるなど熱量が感じられるものとなっています。間違いなく、象潟は芭蕉にとって旅の目的をかなえてくれる無上の場所だったのです。

■歌枕の地「象潟」

かつての潟湖に多数の小島が浮かぶ象潟の景色は多くの人を魅了してきました。景勝地「象潟」は新古今和歌集にその名前が登場するように、歌枕の地として昔から有名で、平安時代には能因法師、鎌倉時代には西行法師がはるばる足を運んで来るほどでした。

松島は大きな湾の中に島々が残る大パノラマの景色であり、象潟は潟の中に島々が点在するジオラマの世界でした。「松島は笑うがごとく、象潟はうらむがごとし」との対比表現に、あらためて芭蕉の表現力の豊かさを感じることが出来ます。

芭蕉がこの地を訪れたことで、歌枕の地「象潟」は多くの文化人にとっての憧れとなりました。小林一茶、菅江真澄、田山花袋、正岡子規といった文人墨客のみならず、芭蕉研究で有名な台湾の李登輝元総統も象潟を訪れています。

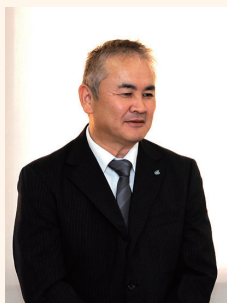
■奥の細道を再考する

皆さんが知っている象潟の句は「象潟や雨に西施がねぶの花」です。あわせて、芭蕉はもう一句象潟で俳句を詠んでいます。それは「汐越や鶴はぎぬれて海涼し」という句です。

市は「腰長や鶴脛ぬれて海涼し」という芭蕉が書いた短冊を所有しています。もちろん真筆であり、たいへん貴重なお宝と言えます。

この句の興味深いところは、上の句が「腰長や」から「汐越や」に変わっているところです。芭蕉は3年かけて奥の細道を推敲し、完成させました。その中で、象潟で詠んだときには「腰長や…」だった句を、奥の細道の完成時には「汐越や…」に変えたのです。どうしてそうしたのかは芭蕉だけが知っているわけですが、現代の私たちもその理由を想像するだけでわくわくしてきます。

私は芭蕉と象潟のかかわりを、もっと多くの皆さんに知ってもらいたいと思っています。奥の細道の最北の地「象潟」。この唯一の価値をもって、にかほ市の歴史の遺産の一つとして教育や観光など多くの分野でもっと活用していければと改めて考えているところです。



にかほ市長
市川雄次

創造を

想像する

市政運営から日常の出来事まであらゆるテーマをコラムにしています。過去のコラムは市HPからご覧になれます。

